

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19H01765

研究課題名（和文）文化適応型認知行動療法とプログラム採用型認知行動療法の比較検討

研究課題名（英文）A randomized controlled trial of cultural-adapted and program-adopted cognitive behavioral therapy for children and adolescents

研究代表者

石川 信一（Ishikawa, Shin-ichi）

同志社大学・心理学部・教授

研究者番号：90404392

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,200,000円

研究成果の概要（和文）：心理療法の文化的適応は近年の臨床心理学の未解決の課題の一つである。本研究は、我が国で開発された文化適応型認知行動療法（CA-CBT）と、国際的プログラムを導入するプログラム採用型認知行動療法（PA-CBT）の効果の違いについて検証することを目的とした。京都、兵庫、長野の各地域から不安症の問題を有する子どもと家族のトライアルへの組み入れがなされた。現時点までに42名の割り付けが行われている。新型コロナウイルスによる遅延のため、本研究の募集は継続されることとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、子どもの不安症に対するCBTのアジア初のRCTとなり、仮説通りの成果が得られれば、アジアにおけるCBTの普及可能性を広げることにつながる。また、心理療法を輸入する立場にある国にとっては、プログラム採用型と文化適応型のプロトコルの効果の差異について知ることによって、「輸入か開発か」といった疑問に応える知見となる。最後に、本研究の成果は、心理療法の文化的適応に関する世界初の実証的知見となり、CBTの国際普遍的な作用機序を明らかにすることにつながる。

研究成果の概要（英文）：Cultural adaptation of psychotherapy is one of the issues to be addressed in current clinical psychology. The purpose of this study was to examine the differences in efficacy between the culturally-adapted cognitive behavioral therapy (CA-CBT) developed in Japan and the program-adopted cognitive behavioral therapy (PA-CBT) adopted an international program. Children and adolescents who have anxiety problems and their families from Kyoto, Hyogo, and Nagano participated in the trial. To date, 42 patients have been assigned to the trial. Due to delays caused by the COVID-19, recruitment for this study will continue.

研究分野：臨床心理学

キーワード：認知行動療法 児童 青年 不安 文化

1. 研究開始当初の背景

認知行動療法 (Cognitive Behavioral Therapy: CBT) は、子どもの不安症に対する心理療法の第一選択としてのエビデンスを確立している。たとえば、メタ分析において、子どもの不安に対する CBT 実施後の主たる不安症からの改善率は、49.4%であることが示されている (James et al., 2020)。しかし、アジアにおける子どもの不安に対する CBT を評価する研究は非常に限られている。Lau et al. (2010) は、アメリカで開発され、世界で最も広く用いられている CBT プログラムの 1 つである Coping Cat プログラムを香港において実施しており、その有効性を示している。日本においては、Ishikawa et al. (2019) が、日本版不安児童・思春期認知行動療法プログラム (JACA-CBT) の開発を行い、日本初の RCT を実施し、CBT の有効性を支持している。

上述の RCT では、2 つの異なるアプローチが採用されている。前者は既存の治療プログラムの翻訳版であるプログラム採用認知行動療法 (Program-Adopted Cognitive Behavioral Therapy: PA-CBT)、後者は新規の治療プログラムである文化適応認知行動療法 (Culturally-Adapted Cognitive Behavioral Therapy: CA-CBT) に基づくアプローチである。例えば、JACA-CBT の行動観察研究では、日本の子どもの 3 分の 2 は初回セッションで不安刺激について話さなかったが、残りの 3 分の 1 は初回から自身の不安について話していることが報告されている (Ishikawa et al., 2020)。以上の結果から、後者のグループの子どもは、導入直後から主たる不安に対処するプログラムを好むかもしれないが、ほとんどの子どもは段階的なアプローチを好む可能性があるということが示唆される。

このような結果や児童青年に対する CBT がまだその有効性に比例して普及していないという点を踏まえると、日本においては、クライアントのニーズに応える上でも、PA-CBT と CA-CBT の両方の有効性を示すことが求められる。アジアの文化に適応した心理療法の消費者の満足度、知識、治療過程や方法に対する納得感を高めると指摘されている (Hwang, 2016)。一方で、PA-CBT が備える忠実性の中にも柔軟性を有するという原則 (flexibility in fidelity; Kendall, 2021) を踏まえると、別の文化的背景に導入される際にも、忠実性を維持したまま元の設定から修正できる可能性も指摘される。CA-CBT と PA-CBT におけるこれらの変数は、不安症の児童・青年に対する CBT の有効性と効果に影響を及ぼす可能性があるが、これらの問題を検討した研究はほとんどない。

2. 研究の目的

本研究 (Multi-, Inter-, and Cross-cultural Clinical Child Study: MIXCS) は、CA-CBT と PA-CBT の有効性検討を目的とした。本研究の主要アウトカム指標である不安症の主診断からの回復については、CA-CBT と PA-CBT は道徳教育コントロール群 (moral education control: MEC) と比べてよりも優れているという仮説を立てた。また、CA-CBT は、PA-CBT よりも、子どもや親の満足度や理解度、セラピストのコンプライアンスや熟練度といった受容性の指標において優れているのに対して、主要アウトカム指標と副次的アウトカム指標に関しては、2 つの CBT 群間に有意差がないと考えられた。

3. 研究の方法

(1) プロトコル

本研究のプロトコルについては、Takashina et al. (2023) に詳細を記載している。MIXCS は、3 群 (プログラム採用認知行動療法: PA-CBT; 文化適応認知行動療法: CA-CBT; 道徳教育コントロール群: MEC) による多施設共同ランダム化比較試験である。京都府、兵庫県、長野県で実施され、募集開始は 2022 年 1 月 1 日、試験開始は 2022 年 4 月 1 日、試験終了は 2025 年 3 月 31 日を予定していたが、こちらは延長の予定である。CONSORT は Figure 1 に示された通りである。

参加者は、無作為化の第一段階で、性別と年齢のバランスを考慮した偏ったコイン割り付けによって 3 群に等しい比率 (1:1:1) で割り付けられた。管理センターである信州大学医学部附属病院臨床研究センターの担当者が、独立して割り付けを行った。データ管理については、大学病院臨床試験アライアンス臨床研究支援システム (UHCTACReSS) を用いて行った。MEC 終了後、対照群の参加者は、1:1 の比率であらかじめ決められた無作為割付に基づき、PA-CBT (MEC-P) または CA-CBT (MEC-C) のいずれかに参加した。

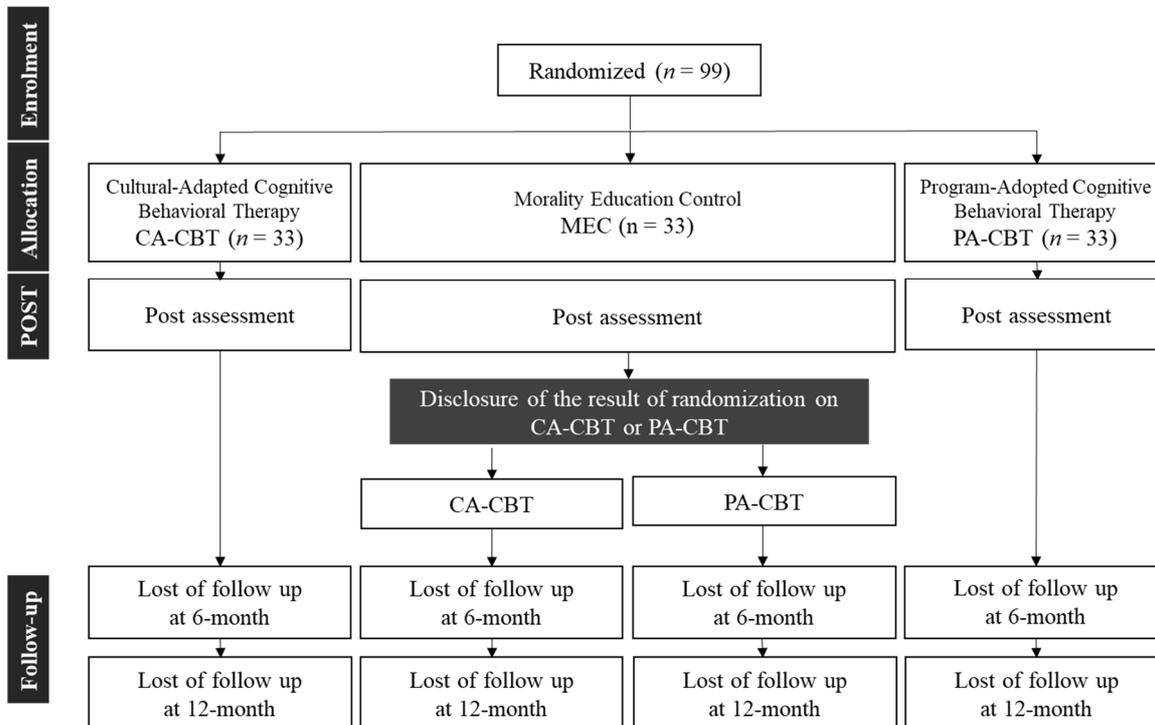


Figure 1. CONSORT flowchart of the study design.

(2) 介入技法 (Table 1)

プログラム適応型認知行動療法 (PA-CBT): PA-CBT としては, Coping Cat プログラムに次いで広く用いられている治療マニュアルの1つである Cool Kids (Rapee et al., 2006) を適用した。子どもと保護者は, 同席で 10 セッションを受けた。Cool Kids は開発者 (Centre for Emotional Health, Macquarie University) の標準的な手順に従って, 翻訳された。セラピストのトレーニングは, 1) トレーニングビデオ (273 分) の視聴と治療マニュアルの読解, 2) クールキッズ実施のコツを含む質疑応答の視聴, 3) ロールプレイまたは過去の治療セッションの見学, 4) パイロットケースの実施から構成された。

文化適応認知行動療法 (CA-CBT): 日本で唯一の RCT が実施されている JACA-CBT を CA-CBT として採用した。JACA-CBT は, 既存のエビデンスに基づいた CBT をもとに開発された日本独自のプログラムである (Ishikawa et al., 2019)。8 セッションと数回のブースターセッションで構成されているが, 本研究では PA-CBT と比較できるように 10 セッションを親子同席にて実施した。セラピストのトレーニングは, 1) トレーニングビデオ (144 分) の視聴と治療資料の閲覧, 2) 過去の治療セッションの見学, 3) パイロットケースの実施から構成された。

Table 1 介入の構成要素

No.	CA-CBTの構成要素	No.	PA-CBTの構成要素
1	心理教育	1	心理教育
2	心理教育	2	現実的な思考
3	認知再構成法	3	不安階層表の作成
4	認知再構成法	4	不安階層表の作成
5	認知再構成法	5	エクスポージャー法の進捗確認
6	リラクセーション	6	エクスポージャーの進捗確認, セッション内エクスポージャー
7, 8, 9	セッション内エクスポージャー, 認知再構成法, リラクセーション	7, 8, 9	エクスポージャーの進捗確認, セッション内エクスポージャー
10	終結, 将来の計画	10	復習, 維持, 将来の計画

Note. CA-CBT=The Culturally Adapted Cognitive Behavioral Therapy program, PA-CBT= The Program Adopted Cognitive Behavioral Therapy program.

道徳教育コントロール (MEC): MEC 条件の子どもたちには, 文部科学省が推奨する道徳教育に関する副読本が配布される。この条件の参加者は, 3 回 (10 週間) の個人セッションを受け, 実践者と教科書の内容を話し合った。

(3) アウトカム評価

アウトカム評価は、Table 2 に示すスケジュールにしたがって行われた。評価は、臨床心理士または研修中の心理士である独立した評価者 (IE) によって行われた。評価者は割り付けがマスクされており、トレーニングを受けた後に評価者として研究に参加した。

主要アウトカム指標：主要アウトカムは、IE が ADIS (Anxiety Disorders Interview Schedule for DSM-IV for children: Silverman & Albano, 1996) に基づいて評価した主たる不安症の診断の有無であった。

副次的アウトカム指標：副次的評価として、介入の有効性を評価するために、自己報告式および保護者報告式の質問票が用いられた。臨床家重症度評価 (CSR) は、ADIS に基づいて IE が評価した。自己報告および親報告の不安症状は、それぞれ日本語版の児童用 Spence Children's Anxiety Scale (SCAS) および親用 SCAS (SCAS-P) により測定された (Ishikawa et al., 2009; Ishikawa et al., 2014)。自己報告によるうつ症状は、日本語版うつ病自己評価尺度 (Depression Self-Rating Scale for Children) を用いて測定された (Murata et al., 1996)。認知の誤りは、Children's Cognitive Error Scale (CCES; Ishikawa, 2012) で評価された。自己および親が報告する巻き込まれに関する評定は、家族の巻き込まれ尺度 (FASA) および児童報告版 (FASA-CR) によって測定された (Lebowitz et al. 2013; Lebowitz et al. 2015)。

その他の尺度：その他に、CAS-CBT (Competence and Adherence Scale for Cognitive Behavioral Therapy; Bjaastad et al., 2016) と C-BOS (Cross-cultural Behavioural Observation System; Ishikawa & Hudson, 2019) が用いられていた。さらに、子どもと保護者双方の満足度と理解度、セラピストによるコンプライアンス、親しみやすさ、持続性、参加者の理解度を測定した。

Table 2 データ採取スケジュール

項目	電話受付 簡易スクリーニング	Pre	CBT 開始日	CBT 実施期間 (約10週間)	Post	CBT 実施期間 (約10週間)	6ヶ月後FU	12ヶ月後FU	中止時
時期		CBT 開始 2週間以内	基準日		3ヶ月±1		6ヶ月±1	12ヶ月±1	
訪問(評価のみ)	Time 0	Time 1			Time 2		Time 3	Time 4	
患者背景の確認 (上記9.)									
同意文書取得									
適応性の確認									
半構造化面接 (上記1.)									
本人(子ども)自己評定 (上記2.3.4.5.)									
保護者評定 (上記2.5.)									
被験者登録・割付						MEC 群 割付オープン			
認知行動療法 (CBT) 参加				←→ (1~2週間に一回の CBT 参加)		←→ (1~2週間に一回の CBT 参加)			
行動観察									
プログラムのアンケート (子ども) (上記6.)									
プログラムのアンケート (保護者) (上記6.)									
チェックイン 質問項目									

4. 研究成果

MIXCS は、CA-CBT と PA-CBT の両 CBT 条件が、注意コントロール条件 (MEC) より優れているか検討する目的でデザインされた多施設共同 RCT である。研究助成期間 (2019-2024 年) は、COVID-19 による影響を直接的に受けているため、プログラムを実施する施設への入所が制限され、募集の延期が繰り返された。その結果、2022 年からの募集開始を余儀なくされ、助成期間に目標とされる対象者数の組み込みには至っていない。研究期間終了時点では、42 例が組み込まれており、目標数の 43.8% を達成している。2022 年からは、順調に目標ラインに迫る対象者の組み入れが行われているため、本研究助成期間後も募集を継続することで目標数の確保を目指す予定である。

児童青年期の不安症に対しては、CBT が第一選択肢となる心理社会的介入であることが示されているが、多様な文化的背景に応じてエビデンスに基づく治療マニュアルを選択すべきガイドラインはない。エビデンスに基づく実践は、1) 利用可能な最善のエビデンスの利用、2) 専門知識、経験、資源を含むセラピストの変数、3) 特性、ニーズ/価値観、好み等、を含むクライアントの変数から構成される (Spring, 2007)。そのため、CA-CBT と PA-CBT のどちらもが、実質的な効果をもたらすのであれば、臨床家はクライアントの嗜好やセラピストの熟練度などの各治療要因に応じて、どちらのプロトコルを選択することが可能となる。さらに、MIXCS では、コンプライアンスや熟練度など、CA-CBT と PA-CBT の CBT セッションの間に共通する治療要因と異なる治療要因を明らかにすることが期待される。そのため、本研究の成果は、エビデンスに基づく実践の学際的モデルに基づき、クライアントの要因と、実施者の要因を考慮した上での、臨床的意思決定に対して実践的示唆を与えることが可能となる。

文献

- Bjaastad, J. F., Haugland, B. S., Fjermestad, K. W., Torsheim, T., Havik, O. E., Heiervang, E. R., & Öst, L. G. (2016). Competence and Adherence Scale for Cognitive Behavioral Therapy (CAS-CBT) for anxiety disorders in youth: Psychometric properties. *Psychological assessment*, 28(8), 908–916. <https://doi.org/10.1037/pas0000230>
- Hwang, W. C. (2016). *Culturally adapting psychotherapy for Asian heritage populations: An evidence-based approach*. Elsevier Academic Press.
- Ishikawa, S. (2012). Cognitive errors, anxiety, and depression in Japanese children and adolescents. *International Journal of Cognitive Therapy*, 5, 38–49.
- Ishikawa, S., & Hudson, J. L. (2019). *Cross-cultural Behavioural Observation System: Coding behavioural coding manual and calculation sheets (3rd ver.)*. Faculty of Psychology, Doshisha University.
- Ishikawa, S., Kikuta, K., Sakai, M., Mitamura, T., Motomura, N., & Hudson, J. L. (2019). A randomized controlled trial of a bidirectional cultural adaptation of cognitive behavior therapy for children and adolescents with anxiety disorders. *Behavior Research and Therapy*, 120, 103432. <https://doi.org/10.1016/j.brat.2019.103432>
- Ishikawa, S., Sato, H., & Sasagawa, S. (2009). Anxiety disorder symptoms in Japanese children and adolescents. *Journal of Anxiety Disorders*, 23, 104–111. <https://doi.org/10.1016/j.janxdis.2008.04.003>
- Ishikawa, S., Shimotsu, S., Ono, T., Sasagawa, S., Kondo-Ikemura, K., Sakano, Y., & Spence, S. H. (2014). A parental report of children's anxiety symptoms in Japan. *Child psychiatry and human development*, 45(3), 306–317. <https://doi.org/10.1007/s10578-013-0401-y>
- James, A. C., Reardon, T., Soler, A., James, G., & Creswell, C. (2020). Cognitive behavioural therapy for anxiety disorders in children and adolescents. *The Cochrane database of systematic reviews*, 11(11), CD013162. <https://doi.org/10.1002/14651858.CD013162.pub2>
- Kendall, P. C. (2021). *Flexibility within fidelity: Breathing life into a psychological treatment manual*. Oxford University Press.
- Lau, W. Y., Chan, C. K., Li, J. C., & Au, T. K. (2010). Effectiveness of group cognitive-behavioral treatment for childhood anxiety in community clinics. *Behaviour research and therapy*, 48(11), 1067–1077. <https://doi.org/10.1016/j.brat.2010.07.007>
- Lebowitz, E. R., Woolston, J., Bar-Haim, Y., Calvocoressi, L., Dauser, C., Warnick, E., Scahill, L., Chakir, A. R., Shechner, T., Hermes, H., Vitulano, L. A., King, R. A., & Leckman, J. F. (2013). Family accommodation in pediatric anxiety disorders. *Depression and anxiety*, 30(1), 47–54. <https://doi.org/10.1002/da.21998>
- Lebowitz, E. R., Scharfstein, L., & Jones, J. (2015). Child-Report of Family Accommodation in Pediatric Anxiety Disorders: Comparison and Integration with Mother-Report. *Child psychiatry and human development*, 46(4), 501–511. <https://doi.org/10.1007/s10578-014-0491-1>
- Murata, T., Shimizu, A., Mori, Y., & Oushima, S. (1996). Childhood depressive state in the school situation: Consideration from the Birlerson's scale. *Saishin Seishin Igaku*, 1, 131–138.
- Rapee, R., Lyneham, H., Schniering, C., Wuthrich, V., Abbott, M., Hudson, J., & Wignall, A. (2006). *Cool Kids therapist manual: For the Cool Kids child and adolescent anxiety programs*. Centre for Emotional Health, Macquarie University.
- Silverman, W. K., & Albano, A. M. (1996). *Anxiety Disorders Interview Schedule for DSM-IV: Child version*. New York: Oxford University Press.
- Spring B. (2007). Evidence-based practice in clinical psychology: what it is, why it matters; what you need to know. *Journal of clinical psychology*, 63(7), 611–631. <https://doi.org/10.1002/jclp.20373>
- Takashina, H. N., Ueda, S., Sakai, M., Takahashi, F., Sato, H., Hudson, J. L., Rapee, R. M., & Ishikawa, S. (2023). Randomised controlled trial of cultural-adapted and programme-adopted cognitive behavioural therapy for children and adolescents' anxiety in Japan: protocol for a Multi-, Inter-, and Cross-cultural Clinical Child Study (MIXCS). *BMJ open*, 13(7), e068855. <https://doi.org/10.1136/bmjopen-2022-068855>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 5件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Takashina Hikari N, Ueda Satsuki, Sakai Mie, Takahashi Fumito, Sato Hiroshi, Hudson Jennifer L, Rapee Ronald M, Ishikawa Shin-ichi	4. 巻 13
2. 論文標題 Randomised controlled trial of cultural-adapted and programme-adopted cognitive behavioural therapy for children and adolescents' anxiety in Japan: protocol for a Multi-, Inter-, and Cross-cultural Clinical Child Study (MIXCS)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 BMJ Open	6. 最初と最後の頁 e068855 ~ e068855
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1136/bmjopen-2022-068855	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 Ishikawa Shin-ichi, Kishida Kohei, Takahashi Takahito, Fujisato Hiroko, Urao Yuko, Matsubara Kohei, Sasagawa Satoko	4. 巻 26
2. 論文標題 Cultural Adaptation and Implementation of Cognitive-Behavioral Psychosocial Interventions for Anxiety and Depression in Japanese Youth	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Clinical Child and Family Psychology Review	6. 最初と最後の頁 727 ~ 750
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s10567-023-00446-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 石川信一	4. 巻 55
2. 論文標題 教育の現場で用いる子どもへの認知行動療法	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 心と社会	6. 最初と最後の頁 23-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Okawa Sho, Arai Honami, Nakamura Hideki, Ishikawa Shin-ichi, Creswell Cathy, Shiko Yuki, Ozawa Yoshihito, Kawasaki Yohei, Shimizu Eiji	4. 巻 51
2. 論文標題 Guided parent-delivered cognitive behavioural therapy for Japanese children and parents: a single-arm uncontrolled study	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Behavioural and Cognitive Psychotherapy	6. 最初と最後の頁 265 ~ 270
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1017/S1352465822000704	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Ishikawa Shin-ichi, Romano Mia, Hudson Jennifer L.	4. 巻 53
2. 論文標題 A Comparison of Interactions Among Children, Parents, and Therapists in Cognitive Behavior Therapy for Anxiety Disorders in Australia and Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Behavior Therapy	6. 最初と最後の頁 34 ~ 48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.beth.2021.05.008	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 石川 信一、小野 昌彦	4. 巻 46
2. 論文標題 教育分野への認知行動療法の適用と課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 認知行動療法研究	6. 最初と最後の頁 99 ~ 110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24468/jjbct.19-002	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ishikawa Shin-ichi, Kikuta Kazuyo, Sakai Mie, Mitamura Takashi, Motomura Naoyasu, Hudson Jennifer L.	4. 巻 120
2. 論文標題 A randomized controlled trial of a bidirectional cultural adaptation of cognitive behavior therapy for children and adolescents with anxiety disorders	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Behaviour Research and Therapy	6. 最初と最後の頁 103432 ~ 103432
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.brat.2019.103432	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 加藤澄江・石川信一	4. 巻 12
2. 論文標題 登校しづりを示す小学1年生の児童に対する認知行動療法	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 認知療法研究	6. 最初と最後の頁 141-151
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Ishikawa, S., Romano, M., & Hudson, J. H.
2. 発表標題 A comparison of interactions among children, parents, and therapists in cognitive behavior therapy for children and adolescents with anxiety disorders in Australia and Japan.
3. 学会等名 The 55th Association for Behavioral and Cognitive Therapies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石川信一
2. 発表標題 「子どものストレスと認知行動療法 Special Interest Group (SIG)としての活動を開始してー
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第47回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石川信一
2. 発表標題 子どもの不安に対する認知行動療法
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第46回大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石川信一
2. 発表標題 子どもの認知行動療法 - 20年の歩み -
3. 学会等名 日本認知療法学・認知行動療法学会第20回大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ishikawa, Shin-ichi
2. 発表標題 A culturally-adapted cognitive behavior therapy for children with anxiety disorders: The West might find the East heading toward a CBT new era
3. 学会等名 13th International Congress of Clinical Psychology (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Arai H., & Ishikawa, S.
2. 発表標題 Examining Cultural Influences in the Treatment of Anxiety Disorders: Encounters Between East and West
3. 学会等名 World Congress of Behavioral and Cognitive Therapies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石川信一
2. 発表標題 子どもの認知行動療法 - 困った！こんなときどうする？
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第45回大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石川信一
2. 発表標題 児童思春期に対する認知行動療法
3. 学会等名 第19回日本認知療法・認知行動療法学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石川信一
2. 発表標題 学校教育の中で認知行動療法が生き延びるためには？
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第45回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

石川研究室 https://ishinn.doshisha.ac.jp/ 不安に悩むみなさんへ https://mixcs.jp/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐藤 寛 (Sato Hiroshi) (50581170)	関西学院大学・文学部・教授 (34504)	
研究分担者	高橋 史 (Takahashi Fumito) (80608026)	信州大学・学術研究院教育学系・准教授 (13601)	
研究分担者	酒井 美枝 (Sakai Mie) (80813120)	名古屋市立大学・医薬学総合研究院(医学)・助教 (23903)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	吉岡 真有梨 (Yoshioka Mayuri)	同志社大学・心理臨床センター・臨床研究員 (34310)	
研究協力者	加藤 志成 (Kato Shinaru)	同志社大学・心理臨床センター・臨床研究員 (34310)	
研究協力者	櫻井 摩衣 (Sakurai Mai)	信州大学・教育学部・研究員	
研究協力者	神田 満 (Kanda Mitsuru)	同志社大学・心理臨床センター・臨床研究員 (34310)	
連携研究者	高階 光梨 (Takashina Hikari) (90912650)	千葉大学・子どものこころの発達教育研究センター・特任研究員 (12501)	
連携研究者	上田 紗津貴 (Ueda Satsuki) (00908080)	京都文教大学・臨床心理学部・助教 (34320)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関